

琉球大学学術リポジトリ

[寄稿]沖縄におけるコ-ヒ-樹の導入と栽培

メタデータ	言語: 出版者: 南方資源利用技術研究会 公開日: 2014-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 宮里, 清松, MIYAZATO, Kjyomatsu メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/0002016577

寄稿

沖縄におけるコーヒー樹の導入と栽培

宮里清松
(琉球大学名誉教授*)

Instruction and Culture of Coffea Tree, in Okinawa

Kiyomatsu MIYAZATO (Honorary Professor, University of The Ryukyus.)

1. はじめに

コーヒーは茶、ココアと共に非アルコール性飲料として一般に広く利用されており、コーヒー樹は沖縄に種子を導入して栽培された事例がある。

コーヒー樹について世界的規模での栽培の歴史、コーヒーの飲料としての利用、沖縄でのコーヒー樹の栽培について、資料に基づいて述べることにする。

2. コーヒー樹の来歴

コーヒー樹はアフリカ・アビシニアの原産で、16世紀にアラビアに導入され、その後200年を経てジャワに導入された。続いてアジア、アフリカ及びアメリカの熱帯地で一般に栽培されるようになった。現今ではブラジル、コロンビア、旧蘭領東印度、ベネズエラ、サルバドル、グアテマラ、メキシコ等が主産地である。

台湾においては日本領台前の明治15年頃、既に英人某が台北州下の三峽に植えたことがあり、領台後においては明治35年に台湾総督府技師・田代安定が、殖産局恒春熱帯植物殖育場(後の台湾総督府林業試験所恒春支所)で試作して良果を得た。さらに大正8年から嘉義農業試験支所において品種を蒐集し、各種の調査研究を行なった結果、台湾でのコーヒー栽培の基礎が確立した。

日本におけるコーヒー樹の植栽は明治11年ごろインド及びハワイから小笠原島に移植したのが始めてである。

3. コーヒー樹の栽培適地

世界でコーヒーの主要生産国は南緯25度、北緯25度の間の無霜地帯であり、熱帯地域に栽培される。このうち中南米諸国は世界生産額の60%を占めている。

コーヒー樹はアカネ科コヘア属 (coffea) に所属し、常緑多年生で高さ4.5~9.0mに達する熱帯作物である。

コーヒー属には25の種があり、そのうち重要な種はアラビアコーヒー、ロブスタコーヒー、リベリアコーヒーの3種である。アラビアコーヒーは世界で最も多く生産される種で、世界の約90%はこの種で占められている。

アラビアコーヒーは産地名を付して市販されるものに、モカコーヒー(アラブのモカ港付近で栽培・輸出)、ブラジルコーヒー、コナコーヒー(ハワイ産)、ジャワコーヒーなどがある。

栽培する場合には管理、収穫を容易にするために3~4mの高さに整枝する。また日光の直射をさけて炎暑を和らげるために、庇陰樹を植えて半日陰にする。赤道近くの地域でコーヒー栽培用に植えられている庇陰樹は、コーヒー樹の昼間の代謝から夜間の代謝に切りかえるために、朝方と夕方の光の強さをほどよく削減し、花芽形成をひきおこさせるために暗期を長くす

*沖縄県那覇市松川398

るように働く。コーヒー樹は典型的な短日植物であるが、熱帯では特に早朝や夕方はやくから日陰となるようなところでよく開花する。

ウエント博士はアメリカ・加州工科大学のエアハート植物実験所で、コーヒー樹（品種はアラビアコーヒーのバーボン）も材料に用いて実験を行なった。その結果、コーヒー樹の栄養生長は23℃の昼間温度、17℃の夜間温度で最適であるが、花芽が最も多く形成されるのは、最適温度が昼間30℃、夜間23℃であった。昼間温度20℃、夜間温度14℃でも花芽は形成されるが、非常におそい。昼間17℃、夜間12℃の温度では花芽が形成されず、またほとんど生長しなかったという。

温度条件からみると、沖縄はコーヒー樹の栽培に適していると考えられる。

4. コーヒーの飲料としての利用

コーヒーが飲料として初めて確認されたのはアラビア半島・イエメンあたりの遊牧民であったという。この遊牧民が飼っていた羊たちが、あるとき見馴れぬ植物の実を食べていっこうに眠らなくなってしまった。その植物の実を人びとは好奇心からいじっているうちに、黒い苦味のある液体を抽出することに成功した。いうまでもなくこれがコーヒーである。

コーヒーは茶、ココアとともに非アルコール性飲料のうちで、最も大衆的で欠かすことのできない飲物の一つである。

インスタント・コーヒーの製造に初めて手をつけたのは日本の加藤という人である。加藤は1899年にシカゴにソルブル・ティをもって現れたが、これは失敗した。その後、コーヒーに転じ、1901年に汎米博覧会でソルブル・コーヒーを売り出した。これが世界最初のインスタント・コーヒーである。

5. 沖縄でのコーヒー樹の栽培

沖縄では笹森儀助の「南島探険」によると、西表島に農商務省のキナ、コーヒー樹の試植地

があり、明治24年6月1日にコーヒー樹を試植して実を結ぶ、とある。また、本部間切伊豆味村山字「ナリシトウ」山に農商務省試植地があり、明治24年5月22日に田中技師が出張して、キナ樹とコーヒー苗を植えて何れも生存しているが、八重山の如く未だ結実していない、と記している。これが沖縄本島でのコーヒー樹の栽培に関するはじめての記録である。

大正12・3年ごろ尚順男爵がハワイからコーヒーの種子を持ち帰り、那覇市首里桃原町の桃原農園を経て本部町字伊豆味の尚家の農園に植えた。

戦後においては昭和26年ごろ、石垣市真栄里の喜友名朝彦が沖縄県農業試験場名護支場からハワイ産アラビアコーヒーの種子をもらい、石垣市の於茂登岳山中と自宅の庭先で栽培して、コーヒーの実を収穫して飲用に供した。

また、具志川市米原の和字慶朝伝も戦後、コーヒー樹の栽培を本格的に取り組みはじめた。

6. 琉球大学でのコーヒー樹の試作と光合成の実験

(1) 材 料

①ハワイ導入種 この品種は戦後米国民政府経済財政課のコーラー氏がハワイから沖縄県農業試験場に導入し、名護支場（支場長・比嘉武吉）で試作した樹から播種した。

②メキシコ導入種 この品種は琉球大学農学部比嘉照夫教授が、南米から導入した。

①、②とも品種はアラビアコーヒーである。

(2) 発芽試験

名護産および南米導入種を用いて、温度を25℃と30℃にして発芽試験をした結果、両品種とも発芽速度は30℃で速いが、総発芽数は両者に差がなかった。

(3) 光合成速度

コーヒー樹の光合成の光飽和点を確認するために、農学部内の施設で光合成速度を測定した。

なお、育てたコーヒーの苗を西表島にある琉

球大学農学部附属熱帯農学研究施設に植えつけ、自然放任区と剪定区を設けて生育状況を調査した。

参考文献

- 1) 近藤萬太郎 日本農林種子学、昭和17年。
- 2) 金平亮三 熱帯有用植物誌、(大正15年)、昭和52年覆刻版。
- 3) 笹森儀助 南島探險、明治26年。
- 4) 台湾農家便覧 昭和19年版。
- 5) 東京帝国大学農学部附属演習林、台湾ニ生育スベキ熱帯林木調査、大正13年。
- 6) ウェント 植物の生長と環境、輪田潔・富田豊雄訳、昭和34年。